



TITLE:

<批評・紹介> 米内山庸夫著「蒙古風土記」「蒙古草原」「蒙古の理想」

AUTHOR(S):

岡崎, 精郎

CITATION:

岡崎, 精郎. <批評・紹介> 米内山庸夫著「蒙古風土記」「蒙古草原」「蒙古の理想」. 東洋史研究 1942, 7(6): 429-431

ISSUE DATE:

1942-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/138848>

RIGHT:

蒙古風土記 米内山庸夫著

四六判四四七頁 昭和十三年八月

改造社發行 價貳圓七拾錢

蒙古草原 同 著

A5判二三三頁 圖版一九一頁

昭和十七年一月 改造社發行 價七圓

蒙古の理想 同 著

B6判二八八頁 昭和十七年六月

改造社發行 價貳圓貳拾錢

外交官として久しく蒙古の地にあり、詳に視察されると共に、識見を高められた米内山庸夫氏は、同仁・蒙古・滿蒙等の諸雜誌に屢々その見聞を發表され、識見の程を示されてゐた。そして此等諸論文は纏められて、先づ「蒙古風土記」と題して、昭和十三年に刊行された。更に氏の蒙古研究が引續いて行はれた結果、今年に入るや、「蒙古草原」が、更に「蒙古の理想」が相次いで出版されたのである。

蒙古研究三部作とでも稱すべき此等三書の中に一貫して存するものは、著者の蒙古に對するひたすらなる情熱であらう。嘗てはその遊牧生活の中より湧き出でた軍事的威力を以て大帝國

の建設を成就した蒙古族の現状を見る時、誰とても痛歎の聲を發せざるを得ない。彼等遊牧民とは不可離の關係にある草原は支那人のあくなき進出によつて次第に農耕地と化し、狡猾な支那商人は素朴の民蒙古人に對して搾取の手を弛めない。かゝる痛ましき現状を目のあたりに見せつけられた米内山氏が、蒙古人を如何にすべきか、如何にしてかゝる現状より彼等を救出すべきか、といふことに就いて眞剣に考へられたのは凡そ當然のことであり、此等三書はかゝる思索の結晶とでも稱すべきものであらう。氏の經世家的識見は三書を通じて、屢々見られるのであるが、その一々に就いて云々することは姑く措き、三書の學界に對して占める位置を致へてみたい。

先づ三書の内容を目次によつて窺はう。

最初の「蒙古風土記」は、蒙古草原を行く・再び蒙古草原を行く・三度び草原を行く・ホロンバイル草原・大興安嶺を行く・草原民族・原始民族の遺跡を探る・嶺南蒙古記・上都古城行等の諸章より成る。次いで出た「蒙古草原」は第一編ホロンバイルは、草原・蒙古の春・湖と河・生物・氣象・砂丘・遺跡及遺物・民族・草原の生活・オボ及オボ祭・喇嘛及喇嘛廟・草原繁昌記・家畜等の諸章に分れ、第二編大興安嶺は、森林民族・トウングース・ロシア人部落の諸章より成る。本書には更に、以上記した諸章に對應して貴重な圖譜二百葉許りが收録されてゐるが、之については後に叙べよう。更に續いて出された「蒙古の理想」は、いはゞ右二書の續編として、蒙古に對する結論を述べたものである。蒙古及び蒙古人・蒙古人の生活・蒙古の理想・草原の夢の諸章を以て構成されてゐる。

氏も言はれてゐるやうに、「蒙古風土記」は主として蒙古草原を廻り歩かれたときの紀行及び感想を記したものであり、「蒙古草原」は蒙古草原・蒙古人の生活の總括的な記述を含むと共に寫眞集でもあつて、いはゞ蒙古の記録寫眞帳たる體裁を備へてゐる。そして「蒙古の理想」に至つて氏の理論は整つた形に於て提示されるのであるが、それは先の二書に散見するものが次第に發展せしめられた所が多い。此等三書は切り離して見ることは出来ぬのであり、以下三書の内容をつき合せながら見て行きたい。

氏の所説の中心は蒙古族の華化にあると思ふ。北方民族の華化に就いては、既に東洋史家の側から多くの業績が出され、この事實に關する限り、氏の所説には別段聽くべきものはないやうに思ふが、しかし、その華化の事實を如何にして防ぐべきか、華化しつつある蒙古人、漢人との混血により次第にその特性を失ふのみか、草原を捨てゝ無爲徒食の忌むべき生活を爲しつつある蒙古人、かゝる傾向を如何にして防止するか、といふ點に想到された所に氏の理論の特色があらう。その對策として氏は蒙古人がその草原を死守すべきことを力説する。草原を捨て、草原―家畜―遊牧民といふ三位一體の生活を止めて定住農耕生活に入つたとて到底支那人に抗し得ない、草原を死守して遊牧生活を維持し、それを更に改良することによつてこそ、蒙古民族の繁榮は期し得られるとされ、更に、蒙古人をして草原を失はしめざる爲には、漢人の蒙古進出とそれによる草原の耕地化を禁すべきことを論ぜられた。氏の所謂「蒙古の理想」はかゝる後にこそ實現されるわけであらう。實にこの問題こそ

は、著者の胸中を去らぬものと思はれる。氏が現地に於ける多年の體驗によつてかく迄もの見識を有するに至られたことに敬意を表したいと思ふ。

たゞにその理論のみでなく、「蒙古風土記」「蒙古草原」に盛られた氏の紀行文、自然觀察、民俗譚も幾多のよきを有するのであつて、蒙古草原の眞相を傳へてくれる。「荒涼」といふ言葉と恰かもシノニームであるかの如き感のある「蒙古」の地は果して荒涼といふ一色に塗りつぶされたものであらうか。氏の叙述は蒙古草原の美しさを語つて餘す所ない（例へば「蒙古草原」七―八頁）。氏の叙述は極めて豊富な圖版と相俟つて、蒙古の眞相を次々に解明されて行く。就中、「蒙古草原」には二百葉にも餘る貴重な圖版を掲げ、しかも整然たる區分の下に、極めて理解し易い形に於て提供されてゐることに大いに感謝して然るべきであらう。精選された圖版が學術研究に於て占める價値に就いては改めて云々する要がない。にも不拘、從來本邦の蒙古研究書は圖版を伴ふこと少き憾がないではなかつた。松本儒氏の「東蒙古の眞相」（大正二年刊）・關東都督府陸軍部編集「東蒙古」（大正四年刊）などを初めとして、蒙古の眞相解明を意圖したるものは、程度の差こそあれ、圖版不足の感を抱かしめるものが少くなかつた。鳥居きみ子氏の「土俗學上より觀たる蒙古」（昭和六年刊）に至つて、貴重な圖版がかなり多く收録され、東亞考古學界蒙古調査班の「蒙古高原横斷記」（昭和十二年刊、昭和十六年九月再版刊行）にも調査班撮影になる圖版が收められ、桑原臨藏博士は、「東蒙古紀行」（「考史遊記」圖版一九二―二五八）に於て、清末の東蒙古に關する貴重な資料を提

併せられたのであるが、猶、「内蒙古長城地帯」「上都」に收められた圖版は貴重であるが、同書の性質上、その範圍が極めて限定されてゐる。「蒙古草原」に掲げられた圖版は、なほその上に加へらるべきものがあるやうに思ふ。就中、その整つた分類によつて。先づ『蒙古草原』は草原の中心的存在オボ・河・湖などの圖より成り、『生物と氣象』は草原の魚鳥獸の類、草原の自然環境の圖を含み、『砂丘と遺物』は砂丘といふ自然環境とその上に加へられた先住民の行爲の跡―古墳・土器・石器・鐵器などを示す。自然環境より次第に民族自體に對する理解を與へ來つた著者は、『民族と生活』に於て、蒙古諸族の生活内容自體の究明をなし、遊牧民の生活を圖版の上に再現せんと試みた『オボ及オボ祭』と『喇嘛及喇嘛廟』とは、文配階級のものたる喇嘛教と民衆自體の宗教たるオボの信仰（「蒙古風土」記一九五頁）に就いて、相對してその實相を傳ふ。『オボ及オボ祭』に收められたオボの諸相・オボ祭の行事の圖は、『喇嘛及喇嘛廟』所收の神像・喇嘛・喇嘛廟の圖と相對して觀るべきものであらう。『草原の賑ひ』は、シニヘーのオボ祭、喇嘛廟の祭の圖などの他に、バル・ブリヤードの蒙古女の圖が收められ、『家畜』は遊牧民の唯一の財たる家畜の諸相を示し、遊牧の狀況、捕馬の實況などの圖がある。『大興安嶺』はこの山の自然とそこに生を營むものの實況を傳へるものであるが、就中、蒙古人の蛇信仰の圖、オロチョン族の森林生活の圖などは注意してよい。以上は、蒙古の原住民に關するものであつたが、『草原の支那人』に至つて塞外に於ける支那人の活躍を如實に見せつけられる。特有の粘り強さを以て、草原を耕地と化し、巧みに商利を獲、恰かも「雜草

の如き勢」を以て進出する狀況の一端はこゝに示されてゐる。以上、かなり長きに亘つて、氏の蒐集になる圖版を紹介した。此等圖版は「蒙古草原の狀態及び蒙古人の生活を總括的に考へて記述」された本文の記事をより價値あるものたらしめる。貴重な資料を丹念に蒐集された氏の勞苦に對して謝意を表すると共に、氏が叙べられてゐる「内外蒙古全般の綜合的研究としての大蒙古誌」が完成されんことを祈つてやまない。（岡崎精郎）